

令和 5 年 6 月 8 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00451

研究課題名(和文)「植物民俗学」によるヨーロッパ伝承文学研究の発展

研究課題名(英文) The Development of European Folklore Studies in "Botanical Folklore"

研究代表者

植 朗子 (Ue, Akiko)

神戸大学・国際文化学研究科・協力研究員

研究者番号：20611651

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本課題はヨーロッパにおける伝承文学研究のさらなる発展をその目的とし、20世紀の植物学者・ハインリッヒ・マルツェルによる「植物民俗学」の見直しと、その研究の活用について新しい提言を行うものであった。マルツェルは自然科学分野である植物辞典に「植物の迷信」を併記し、これらの伝承記述が、植物学分野で明らかされている特性と関係があることを指摘した上で、「植物民俗学」を提唱した。本研究ではヨーロッパ伝承文学の文献をもとに、マルツェルによる植物事典の再検討を行った。「植物の魔術的效果」が、植物の実際の生態や薬効と関連が深いことを詳らかにし、マルツェルの研究意義について明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、植物学と伝承文学という異なる領域の研究を結びつける「植物民俗学」に再び光を当てた内容である。ヨーロッパ伝承文学研究では、幻想的な植物モチーフには実際の植物学的特性とは結びつかない「非科学的なもの」が含まれると理解されることがあり、伝承における植物学的な特徴の記述が看過されてしまうことがあった。そのため、一部の伝承においては、なぜその物語にその植物モチーフが使用されているのか、十分な検討がなされないままのものが残っている。しかし、ハインリッヒ・マルツェルの植物事典に掲載されている植物学的事項と、併記されている伝承記述を確認することで、正しい植物伝承の理解が進むことがわかった。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to further the study of folklore literature and traditions in Europe. Heinrich Marzell included both "superstitions about plants" and matters of natural science in his botanical encyclopedia. He proposed the concept of "botanical folklore," suggesting that the description of fantastical folklore is related to the naturalistic character of the botanical field. This research re-examined Marzell's botanical encyclopedia based on the literature of European folklore. It provided a detailed clarification of the deep connection between the "magical effects of plants" and their actual ecological and medicinal properties, shedding light on the significance of Marzell's research.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：植物民俗学 ハインリッヒ・マルツェル 伝承文学 ドイツ民俗学

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究を開始した当初、ヨーロッパ伝承文学(神話・伝説・メルヒェン)の資料を類話ごとに整理していた時、ストーリー上、同じような内容を含む伝承において、「異なる植物モチーフ」が使用されている例を目にした。なぜ異なる植物が、よく似た「不思議な事柄」を物語上で発生させるのか。この疑問を持ったことが研究の発端である。

植物 A にまつわる民間伝承

→ 植物 A と B どちらもストーリー上の役割と特性が同じ

植物 B にまつわる民間伝承

※A と B は異なる種類の植物なのに、なぜモチーフとして同じ役割をおっているのか

※A と B に共通する植物的な特性があるケース → 特性が似ているため、役割も似ている

A と B において、植物的な特性が異なるケース → なぜこのような事象が起きるのか

※A と B の植物特性が異なるケース → 植物分類上は近似種など、名称が混同された可能性

①類話を照合し、比較してみると、民間伝承の原話で表記されていた特定の植物名が、時代の経過とともに、よく似た別の名称に置きかわっていることがあるとわかった。

②翻訳されている場合は、さらに植物名の変化や異同が多い。独和辞典では正式な植物名を特定させることは困難で、専門の植物事典の併用が必須である。しかし、一般の植物事典には、民間伝承などで語られる際に使用する「通り名」の記載が不十分なものもあり、それが正確にどの植物を指していたのか、不明になってしまうものがある。

→植物事典でありながら、植物の「通り名」「一般名称」の記載があり、なおかつそれにもつわる伝承記録が資料として付されているならば、民間伝承研究にとって有意義な資料となりうる。**ハインリヒ・マルツェルの研究が、伝承文学研究に活用できるのではないか。**

### 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、20 世紀ドイツの植物学者であったハインリヒ・マルツェルが提唱した「植物民俗学」を再検討し、その内容をヨーロッパ伝承文学の研究に活用するための基礎的作業を行うことであった。この研究の成果によって、「植物民俗学」の研究史的意義を詳らかにし、現在ではかえりみられることがほとんどない「植物民俗学」を使って、ヨーロッパ伝承文学の研究方法を広げたいと考えた。

(2) 伝承に登場する植物の正確な名称、植物学的な正確な特性を整理し、該当する植物の科学的特徴が、幻想的な伝承の形成に影響を与えている例があることを明らかにする。

(3) 植物の民間伝承を研究対象として、植物の幻想譚、奇譚において、なぜ植物名の改変が起こるのか、その原因について明らかにする。

(4) 伝承において植物の名称が改変されてしまった場合、その植物が本来持っている、薬効や毒性、外見的特徴、生態上の不思議が失われてしまっていないのか、検討する。

### 3. 研究の方法

(1) 伝説やメルヒェンで表記される植物名は、「通り名」など一般的な書き方がされる。ハインリヒ・マルツェルの植物事典を使用し、そこに記載されている植物の民俗学的記述と、正式な植物の学名をつきあわせ、どの植物が源泉となって作られた伝承なのか調査を行う。(研究目的 1 と 2 に該当)

(2) ドイツ語圏を中心とした植物の伝承を整理し、語りの目的、植物の特性によって、伝承の分類を行う。(研究目的 2 と 3 に該当)

(3) 伝承の原話から、新しい物語へ語り直される(翻訳された場合も含む)時に、異なる植物名に置き換わってしまっている事例がないか調査する。(研究目的 3 に該当)

(4) 伝承の中で使用されているモチーフ、話型を確認し、さらに植物が物語の中でどのような役割を果たしているのか検証する。その伝承に挙げられている植物名から、植物学的特性を確認し、そこに幻想的内容と一致する要素がない場合、なぜそのような伝承が語られるに至ったのか、植物名変更の可能性も含めて調査する。(研究目的 3 と 4 に該当)

(5) 植物の奇妙な伝承には、植物の外観的特徴が関係しているものも多い。しかし、たとえば

ドイツと日本の気候差、国内においても分布地域による生育差によって、その特徴すら変化している場合がある。そのため、ドイツ語圏の伝承に登場する植物については、可能なかぎりドイツ語圏の植物園で、その実物を確認した。(研究目的4に該当)

→ドイツ、ベルリン大学附属植物園、ハイデルベルクの薬事博物館で現物の調査/資料収集を行った

#### 4. 研究成果

##### (1) ハインリッヒ・マルツェルの研究の特徴と意義に関する成果

20世紀に入り、近現代の学問として、植物学が理学、農学、医学、薬学といった、いわゆる“理系”分野との接点で発展していく中、ハインリッヒ・マルツェルが提唱した「植物民俗学」という研究領域は、民俗学+文学+文献学+言語学と植物学の知識を融合させたものであることが浮き彫りになった。しかし、植物の伝承に関心を示したマルツェルは、膨大な民間伝承にまつわる資料を活用しているが、植物の生態学や分類学を専門とする研究者は伝承をそれほど重視しない傾向があり、伝承文学研究者は植物の名称の正確さや植物学的特性を意識しながら研究を進めることはあまりなかった。マルツェルの死後、彼の研究内容は、植物学と伝承文学領域で分断され、再び積極的に融合された形跡はないことが明らかになった。そのため、「植物民俗学」の活用は、少なくとも伝承文学研究において、活用されているとは言い難い。

本研究の成果発表によって、「植物民俗学」という、すでに失われつつあるこの分野の意義が再認識されるものと思われる。

##### (2) 植物の伝承の整理/植物の幻想譚と奇譚の分類に関する成果

植物の伝承には、①生と死のサイクルに関連する植物の幻想譚、②病の治癒、蘇生にかかわる奇譚、③祭祀と関係する伝統的な植物利用、④食養生、食文化と関係する植物の言い伝え、⑤植物がもたらす不思議や奇跡にまつわる話、⑥神話、宗教説話とかかわる植物のモチーフやシンボル、といった種類があることが明らかになった。

伝承と関係する植物モチーフには、一年草、多年草、常緑樹、落葉樹など、さらにはキノコやシダなどの種類によって、その語りの特性も変化する。さらに留意が必要なのは、植物モチーフは植物そのものを指すだけでなく、春夏秋冬、昼と夜といったサイクルと関連するものが数多く見られる。とくに、これらのサイクルと関係が深い蘇生譚と転生譚については集中的に調査を行なった。

##### (3) 補足：本研究における「植物民俗学」研究の視点を持ちいて、現代のポップカルチャー作品へと研究範囲を発展させた。

◆マンガ『鬼滅の刃』における植物のモチーフを取り上げ、ヨーロッパ伝承文学で使用されるモチーフとの影響関係について論じた。

『鬼滅の刃』では、主人公の妹の名前が「禰豆子(ねずこ)」で、①ネズの木(杜松、びやくしん、ムロの木)、②鼠子(ねずこ)という植物のいずれかと関係があるのではないかという仮説を立てた。結論としては、伝承文学的な意味において、この2つの植物のどちらの要素も使用している。そのため2つの植物のどちらかなのかをあえて限定しない漢字が当てられている。

◆その他：禰豆子という登場人物については、「雪の中の鬼化」から物語がはじまるが、ラストシーンでは「春の日差しの下にいる人間姿」になっており、植物のサイクル(冬→春)に関連するヨーロッパの民間伝承と共通点が多くあることが明らかになった。

##### (4) 補足：同一の植物であるが、植物の病理から派生した植物奇譚があることを発見

◆グリム兄弟が編纂した『ドイツ伝説集』に「実がついても中身が空洞の麦」の伝承があるのだが、研究方法4と5を用いた調査中に、この伝説が「麦の病理にまつわる記録」から派生していることを発見した。

◆本研究は、①植物伝承の種類の分類に基づいて、②同じような話型を持つ植物の名称を調べる、ことを基本的な姿勢としているが、この成果については異なる。調査中に、植物の病理が植物奇譚と関係していることを見つけるかたちとなった。

◆関連する研究、先行研究として、「魔女が麦の穂を空っぽにしてしまう伝承」に関する調査がすでにあるが、農作物の生産・家畜の飼育にまつわる「魔女の悪行と黒魔術」の一環としてまとめられているものが多く、植物民俗学の視点から論じるのは、本研究がはじめてのものになると思われる。

◆この研究成果については、2023年度中に日本独文学会、あるいはゲルマニスティネンの会で発表をする予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 植朗子	4. 巻 1
2. 論文標題 ドイツ語圏の民間伝承と観光 食文化・食養生・自然療法の事例から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸大学国際文化学研究推進センター2019年度研究報告書	6. 最初と最後の頁 7-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 植朗子	4. 巻 1
2. 論文標題 Arzneipflanzenkunde und Aberglaube in der botanischen Volkskunde	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神話研究	6. 最初と最後の頁 23-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 植朗子
2. 発表標題 植物をめぐる神話的物語 - 治癒、再生、誕生という 変化
3. 学会等名 神話学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 植朗子
2. 発表標題 植物をめぐるドイツ語圏の神話的物語 - 「死者」と「転生」のモチーフ
3. 学会等名 中央大学人文学研究所
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 植朗子
2. 発表標題 現代マンガ研究と伝承文学研究 『鬼滅の刃』竈門禰豆子をめぐる神話的モチーフ
3. 学会等名 法政大学国際日本学研究所：新しい「国際日本学」を目指して（15）公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 植朗子、他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 367
3. 書名 人はなぜ神話 ミュース を語るのか 拡大する世界と 地 の物語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------